

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：64302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770077

研究課題名(和文)映画・テレビにおけるハンセン病患者の表象についての歴史的考察

研究課題名(英文)A Historical Study of Representations of Hansen's Disease in Movies and Television

研究代表者

北浦 寛之(KITAURA, Hiroyuki)

国際日本文化研究センター・研究部・助教

研究者番号：20707707

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：映画やテレビといった大衆メディアが、社会的偏見がいまだに残るハンセン病問題を、歴史的にどのように扱ってきたのかを検証した。具体的には、2015年公開の映画『あん』を取り上げ、過去の関連作品『砂の器』(1974年)など過去作品と比較しての描写の違いに言及した。例えば、1996年の「らい予防法」廃止以降に生まれた劇中の少女が、ハンセン病について学ぶ描写があり、次世代を念頭においた啓蒙的意識が見られることを指摘した。他に、メディアで表象されてきたハンセン病を、当事者たちがどのように受容してきたのかについても明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I examine how movies, television, and other mass media have historically dealt with the issue of Hansen's disease (leprosy). Social prejudice against its patients still exists. For specific discussion I take up the Japanese film titled An (Sweet Bean), released in 2015, and, comparing it with other leprosy-related films made earlier, such as Suna no utsuwa (1974; The Castle of Sand) and examine the differences in the way the malaise is depicted. For example, referring to the way the former portrays that a young woman born after 1996, when the 1953 Leprosy Prevention Law was abolished, and she learns about Hansen's disease, I point out the educational aspect of the film that keeps later generations in mind. I also look at how patients with Hansen's disease have responded to representations of themselves in the mass media.

研究分野：映画学

キーワード：映画 テレビ ハンセン病 受容 差別 表象

## 1. 研究開始当初の背景

代表者は研究開始前に国立療養所栗生楽泉園を訪れて、ハンセン病経験者の過酷な過去の話聞いたことがある。その際、これまで製作されたハンセン病関連の映画がいかに患者たちを不当に描いてきたかを生の声として受け取った。

彼らは自分たちや療養所に対して周囲の理解を求める運動をおこしてきた。例えば栗生楽泉園の在園者は2002年、「国民医療研究所」に「栗生楽泉園の将来構想に関する調査研究」を委託し、療養所の社会化を推し進めるべきだという回答を受け取った。周辺の草津町の住民の約7割が町内に皮膚科・耳鼻科・眼科がないので、楽泉園に外来治療に行くことを望んでいるという。園側も7割の人が楽泉園の社会化に賛成している。しかしながら、そうしたことはまだ現在においても実現されてはいない。その理由のひとつに、ハンセン病、あるいは療養所に対する周囲の理解が依然として不足していることが挙げられる。そこには、前述のように、過去の映画作品が誤ったメッセージを、ハンセン病患者の具体的なイメージとして大衆に提示してきたことが関連しているのかもしれない。それゆえ、ハンセン病関連の映画、あるいはテレビといった映像メディアで、患者たちはどのように表象され、そこにどのような問題を孕んでいたのかを整理することが重要であるという考えに至った。

ハンセン病に関係する映画作品のうち、よく知られているものに、『小島の春』(1940、豊田四郎監督)や『砂の器』(1974、野村芳太郎監督)がある。どちらも原作が有名で、『砂の器』は言うまでもないが、『小島の春』についても実際のハンセン病療養所、長島愛生園の職員であった小川正子の手記が文学的評価を得て、映画化されるに至った。そんな本作について映画学者・加藤幹郎は「大人の患者たちは、子供たちの診察のとき(衆目下での全裸診察や白昼下での脱衣診察)とは対照的に、視覚的に隠蔽された状態で表象される。あるいはカメラに背を向け、薄暗い室内に閉じこもっている」とし、「彼らの「孤独な春」は島の療養所(隔離病棟)の明るい共同生活とは対照的に描かれ」とテキスト分析から明らかにしている。こうした演出や撮影方法の観点からハンセン病関連の映画について言及した文献がある一方で、製作背景も踏まえ、患者ならびに大衆の反応を取り上げて解説した、藤野豊『「いのち」の近代史「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』(かもがわ出版、2001)のような文献もある。例えば、加藤がいみじくも表現した『小島の春』における陰鬱な描写について、同書は実際に患者が「世にも恐ろしい癩の悲惨な感じばかりを与へはしなかつたろうか、この映画を見たわれわれの肉親

はどんな感じを受けたであろうか」という印象を抱いていたことを紹介している。

もっとも以上のような先行研究は、ハンセン病関連の映画について網羅的に言及しているわけではなく、また本研究が目指すところの、映像テキストの分析ならびにその受容に関する調査を包括的に実践することはしていない。そうした課題を克服すべく、申請者は大衆のハンセン病に対する具体的なイメージの形成に多大な影響を及ぼしたであろう、映画ならびにテレビ作品を徹底的に拾い集め、表象の変化を体系的に考察していくことを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまで映画やテレビといった映像メディアにおいて十分に論じられてこなかったハンセン病に関する表象について、映像に内在するテキストを、作品に反映されたであろう同時代の諸々のコンテキストとともに歴史的に読み解くことを目的とする。加えて、各作品を受容してきた大衆と、当事者であるハンセン病患者たちの反応についても調査を行う。それにより、映像が孕むイデオロギーと受容する側の態度との関係性が理解され、これまでのハンセン病関連作品が鑑賞者に与えた影響についても踏み込んだ考察を行う。

ハンセン病患者は「民族浄化」の旗印のもと、近代化を推し進める日本国家によって、強制的に僻地の施設に送られ、90年もの間、外部との交流を絶たれていた。1996年に「らい予防法」が廃止されて、隔離を強いられることがなくなり、しかも病気からの回復をすでに果たしていても、ハンセン病を患って療養所に入った者たちは、外部との交流を今でも十分におこなえない状況にある。ハンセン病経験者は故郷に安心して帰省もできず、周辺の旧態依然とした空気が、家族の心の扉を閉ざしているという。こうして自分の肉親や親近者からも拒絶されるなど、想像を絶する差別や偏見がいまだ根強く残っており、そこには日常的に隔離という行為で見えなくなっていた者たちを表象によって可視化した映画やテレビといった映像メディアの持つ影響力は大きかったと判断できる。ハンセン病経験者との接触が日常的に途絶えている状況では、大衆は映像メディアを通して知る彼らの姿で、その印象を強く植え付けられてきたに違いないのである。

もっとも、だからと言って、各作品がハンセン病差別を助長したか否かに分析の主眼を置くことをしない。ハンセン病関連の表象がいかに映像メディアで展開されてきたのか、その系譜をテキスト分析によって詳しく考察すると同時に、そうしたテキストを受容する一般大衆と患者たちの反応を比較し、齟齬を明らかにすることを企図したものである。

### 3. 研究の方法

本研究を遂行するため、文献を調査しながらハンセン病関連の映画、テレビ作品の蒐集を行うことから始めた。

その際、DVD、VHSなどでソフト化されているものやCS放送他各種メディアで視聴できる以外の作品については、全国各地のフィルム・アーカイブや特集上映を訪ねて鑑賞した。それを繰り返し、ハンセン病関連の表象を、物語の文脈を考慮しつつ、演出や撮影様式など、映像を構成しているテキストを仔細に分析していった。次いで、それらを体系的に整理していく中で、同時代の日本映画とどのような交渉を持って生産されていたのか、映画史的な視点も導入した考察をおこなった。そこには、映画史の枠を超えて、社会情勢が映画にどのような作用を及ぼしていたのかも考慮に入れて、考察を展開した。

こうして映像分析とその整理作業をおこないながら、それらが一般にどのように受容されていたのかを雑誌や新聞などの活字一次資料を調査して判断した。それに対して、ハンセン病患者たちの受容については、国立ハンセン病資料館での調査ならびに資料収集を重点的におこなった他、全国各地の療養所へ赴き、そこでの資料蒐集や聞き取り調査をおこなって、理解を深めていった。

### 4. 研究成果

国際日本文化研究センター発行の『日文研』55号に掲載された、拙論「映画『あん』とハンセン病問題」では、2015年公開の映画『あん』（河瀬直美監督）を取り上げ、過去のハンセン病関連作品と比較しての描写の違いに言及した。例えば、これまでのハンセン病を扱う作品の特徴として、誤解を改める啓蒙的要素が含まれている点を指摘し、それが『あん』ではどのように描かれているのかを論じた。1974年に公開された『砂の器』（野村芳太郎監督）ならば、ハンセン病患者たちの運動の成果もあって、病気への理解を求める字幕がラストに付き、家族にハンセン病患者がいることから小学校入学を拒否された児童を描く実話に基づいた映画『あつい壁』（中山節夫監督、1970年）では、医者がハンセン病に対する正しい知識と差別の現状を説いている。一方で、近年の21世紀になって作られた『あん』では、次世代を意識した演出がおこなわれていた。すなわち、1996年の「らい予防法」廃止以降に生まれた劇中の少女が、ハンセン病について学ぶ描写があり、それは原作にはなかった描写であることから、次世代を念頭においた啓蒙的意識が感じられるのである。

こうして、過去の作品と比較して、近年のハンセン病関連映画の特徴を指摘したことは、ハンセン病に対する映画製作者の姿勢を

明らかにしたことであり、またそれは、現代のハンセン病に対する世間一般の認識や、この問題に対して今求められていることを反映したものであるだろう。以上の点を整理できたことは、映像メディアでハンセン病問題がいかに描かれてきたのかを理解するための大きな前進だと言える。

また、日本映画学会で口頭発表したものと、その内容を補強し文章でまとめた論文成果「ハンセン病経験者の映画体験 映画を観ることと正すこと」では、ハンセン病患者たちがどのように、関連作品を受容してきたのかを明らかにした。『小島の春』で初めて大きく扱われたハンセン病の話だが、療養所の機関誌には当事者の患者たちの不満が記されていた。さらに、後続の作品についても機関誌で批判が展開され、『砂の器』ではついに、全国ハンセン病患者協議会が事前に製作者サイドに抗議のためアプローチしていく事態になった。ただ、こうした機関誌で共有される映画批評は、ハンセン病関連の特定の作品を対象におこなわれたのではなく、他の映画・テレビなどの映像作品でも実践されていた。それゆえ、映像を批評する習慣があり、そうした日常的な映像との接触とそれを批評する行為が、ハンセン病関連の作品に対しての彼らのリアクションと結びついているという見解を示した。それは患者たちの映画受容という、これまでほぼ検討されてこなかった意義深い視点であり、今後もより広範な考察が果たされることを期待する。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

北浦寛之、映画『あん』とハンセン病問題、『日文研』、査読無、55号、2015、8-14。

<http://publications.nichibun.ac.jp/region/d/NSH/series/nich/2015-09-30/s001/s005/pdf/article.pdf>

北浦寛之、ハンセン病経験者の映画体験

映画を観ることと正すこと、『日本映画学会』第5回例会プロシーディングス、2016、63-70。

<http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp/proceedings-reikai-5.pdf>

〔学会発表〕(計 1件)

北浦寛之、ハンセン病経験者の映画体験

映画を観ることと正すこと、日本映画学会第5回例会、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)、2016年6月18日。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北浦寛之 (KITAURA, Hiroyuki)  
国際日本文化研究センター 研究部 助教  
研究者番号：20707707

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )